

# 若手邦楽聴き比べ



【開催日】 平成30年8月23日（木）

【会場】 東京都美術館 講堂

【主 催】 邦楽実演家団体連絡会議

【助 成】 アーツカウンシル東京

(公益財団法人東京都歴史文化財団)



## 三曲

### 「月彩」（二代米川敏子 作曲）

筝I 三橋敏優  
筝II 野口敏翠  
十七弦 岡崎敏優

二〇〇二年二月、米川裕枝（二代米川敏子）の作曲で、その年の三月、第三回「新・日本音楽抄」（国立小劇場）にて初演されました。月の彩りに見る様々な表情を箏I・箏II・十七弦の器楽曲に表現した曲で、「かぐや姫」「アラビアンナイト」「月面着陸」「兎の餅つき」等々、想像を巡らせながら演奏します。初演時は、箏I・箏II・十七弦の三重奏でしたが、後に高橋明邦により打楽器パートが加えられ、平成一五年には花柳寿南海により舞踊化された曲です。本日は初演時と同じ三重奏としてお聞き下さい。

### 「千鳥の曲」

本手 三橋敏優  
野口敏翠  
替手 岡崎敏優

吉沢検校作曲の古雅でシンプルでありながら華やかさを持つ幕末の曲です。この曲は吉沢検校が自ら考案した「古今調子」を使っていました。新組歌「古今組」の一曲とされています。歌詞は千鳥を詠んだ和歌をそれぞれ一首づつ、前歌は古今和歌集から一首、後歌は金葉和歌集から一首を引用しています。後歌で引用している源兼昌の和歌は小倉百人一首にも入っていること有名です。

## 詞章

### 常磐津

### 「将門」

淨瑠璃 常磐津若羽太夫  
常磐津千寿太夫  
常磐津美寿郎  
岸澤満佐志

原作は山東京伝の読本「善知鳥安方忠義伝」で、文化三年（一八〇六）刊。それを脚色したものです。いわゆる天慶の乱の後日物語で、将門の遺児が帝位をねらうという陰謀を主題にしています。

将門の娘如月尼は、父将門の滅亡後仏道に帰依していましたが、弟の良門が肉芝仙という蝦蟇仙人から妖術を習い、父の敵を討ち天下を覆そうとするのを知つて諫めるが、逆に妖術のために復讐の鬼となります。

初演時は「傾城如月実は将門娘滝夜叉」、「大宅太郎光圀」、「鷺沼六郎則友」の三人立ちだったといいます。

### 詞章

恋は曲者 世の人の 迷いの渕瀬 きのどくの 山より落つる 流  
れの身 うき音の琴の それならで  
妻呼び交す 雁金の その玉章をかくばかり  
色に手だれの傾城も 焦がるゝ人に 逢い見ての  
後の思ひに くらぶ山 忍ぶ涙の 春雨を 傘に凌いで 来たり  
ける

大宅の太郎は目を覚まし

光国（以下光）「将門山の古御所に 妖怪変化棲み所を求め 人倫の惱ます由 賴信公の 仰せを受けし光国が 暫しまどろむ其うちに 見慣れぬ座敷の此の体は 正しく変化の所為なるか」

（前歌）塩の山 差出の磯に住む千鳥 君が御代をば  
八千代とぞ鳴く  
(後歌) 淡路島 通う千鳥の鳴く声に 幾世寝覚めぬ  
須磨の関守 幾世寝覚めぬ 須磨の関守

イデ

正体をと 立ち寄る光国 女は慌て押し止め

滝

「ア、申し 様子云わねばお前の疑い 私や都の島原で

光

「ヤア心得難き其一言 波濤を隔てしこの國へ 傾城遊女の身を以つて 来り住むべき謂れなし よし又都の遊女にせよついに見もせぬ其方が 何故我を」

と 不審の言葉

滝 光

「サア お尋ねなくともお前の胸 晴らすは過ぎし 春の頃」

「ア 申し」

滝 光

「ア お尋ねなくともお前の胸 晴らすは過ぎし 春の頃」

と 不審の言葉

滝 光

「サア お尋ねなくともお前の胸 晴らすは過ぎし 春の頃」

と 不審の言葉

## 琵琶

### 「平敦盛」

琵琶 大久保旭夏

現在の筑前琵琶は五絃が主流ですが、明治の創始期の姿を残した四絃の演奏をお聞きいただきます。四絃琵琶は少し小型で、調弦は三味線の本調子と同じです。三・四の絃が複絃で、シンプルながら力強い曲調に特徴があります。演目は平家物語の「敦盛最期」に基づいており、敦盛の美しさと潔さ、直実の葛藤を、原典よりも強調して伝える明治の美文調を味わって下さい。

## 詞章

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響あり

娑羅双樹の花の色 盛者必衰の理を顯す

驕る平家の榮華の夢もひよどり越を吹下す

嵐にさめて明石がた 須磨の浦わの友千鳥

なく音を磯に残しつ影は波間にかくれけり

ここに平家方の一門にて 參議経盛の三男 無官の太夫 敦盛は

父兄弟のあとをしたい駒を速めてただ一騎つれも渚に着き給いしが

すでに御座船も兵船も遙かの沖に漕ぎ出でければ

詮方なみに駒を入れ四五段ばかり泳がせ給いける

心のうちのさびしさを推し測りまいらするに群を離れし小雀の

ねぐら求むる風情にて哀れというもおろかなり

時しも頃は寿永三年如月七日のあけぼのに

吹き荒びたる北風の名残りは猶も絶え果てて

通う千鳥のそれならで駒のあがきもにぶりつ

今や行手も白波に任せたづなかいぐりつ

あせる心は棹弓引き返さじと祈れども時に利あらず駆ゆかず

山抜く力なよ竹の青葉の笛を身に帯びてゆたのたゆたに漂うは  
ただひとひらの紅葉葉の立田の川に散り浮ぶさまとも見ゆるばかり  
なり  
かかる所に熊谷の次郎直実遙かに認め追い来り  
軍扇サツと打ち開きそれに渡らせ給うは平家の御大将と見奉る  
まさならうも敵に背面を見せ給うものかな

返させ給え返させ給えと呼ばわつたり

敵に声をかけられていかで猶予のあるべきぞ

敦盛駒のたてがみ立て直し汀の方へ引返し給えば

熊谷も駒を馳せ寄せて互いに打物抜きかざし

丁々ハッシと切結びしが忽ち馬上に引組んで波打際にドウと落つ  
しばしが程は揉み合いしも熊谷遂に敦盛を組み敷きて

既に御首あげんとて御兜を押上げ見奉るに

薄化粧にかね黒々年はいざよい桂の花

露もしたたる玉の面光りあふれん粧いは天津乙女のかんばせに  
朝日の匂うそれよりも一入まさるあでやかさ

画かまほしき氣色なり

流石に猛き熊谷も年ばえ同じ小次郎に思い比べて手もゆるむ  
焼野のきぎす夜の鶴貴き賤しき押しなべて

子を思わぬぞなかりける理せめて哀れなり

## 三曲(尺八)

「鶴門」(三代川瀬順輔作曲)

尺八 川瀬順輔  
胡弓 長塚梨秋

原曲は、昭和六十三年（一九八八）に三代川瀬順輔が作曲した尺八独奏曲です。孫弟子の一人が八十歳になつたのを祝つて作曲されました。曲名は、その人が経営していた旅館の名を探つたものといい、竹藪のなかに浄土の世界があるという仏教の教えにちなむそうです。おめでたい「鶴にちなんで、古典本曲の『鶴の巣籠』を現代的な感覚で自由に展開させて作品化した「創作本曲」です。

## 琴古流本曲「真虚靈」

尺八 川瀬順輔

尺八は、当初は外来の楽器として我が国に渡来し、その後わが国の文化発展の中で独自のものとして発達して現在に至っています。尺八という名称は昔の中国において使用され始めたものであり、その由来は管の長さを表したもので、一尺八寸という長さの実寸は時代と共に変遷しているものの、現在の八寸管の長さはその名の通り一尺八寸（五四・五センチ）相当です。江戸時代までは普化宗という禅宗の一派に属する虚無僧がお経を唱える代わりに法器としての尺八を吹奏していましたが明治になり、一般の人々がお箏や三味線との三曲合奏に楽器として用いられる様になりました。ただし、虚無僧時代の尺八独奏曲も本曲として吹かれ、「真虚靈」という曲は、この本曲の中でも重要な三つの曲のうちの一つとされています。

## 邦楽実演家団体連絡会議

一般社団法人義太夫協会	清元協会	一般財団法人古曲会	新内協会	特定非営利活動法人筑前琵琶連合会	一般社団法人長唄協会	常磐津協会	一般社団法人長唄協会	公益社団法人日本小唄連盟	公益社団法人日本三曲協会	日本琵琶協会	一般社団法人大阪三曲協会	公益社団法人関西常磐津協会	一般社団法人当道音楽会	古屋邦楽協会
-------------	------	-----------	------	------------------	------------	-------	------------	--------------	--------------	--------	--------------	---------------	-------------	--------